

カナダ・モントリオールでの研究生活

清水たくみ (しみず たくみ)

Desautels Faculty of Management, McGill University

1. マギル大学 (McGill University)

2014年9月から博士課程学生として、また2017年9月からは非常勤講師も兼ねてマギル大学に所属している、清水たくみと申します。在外研究ルポ執筆のご機会をいただきましたので、海外(特に北米)の研究環境に関してご紹介させていただければと思います。

McGill Universityはカナダ・モントリオールに拠点を置き、約4万人の学生を抱え研究に注力する総合大学です(QS World University Rankings 2018では32位)。私はDesautels Faculty of Management(経営学部)のInformation Systems(経営情報学)専攻に所属しており、経営学部には学部生2,300人/MBA学生200人/Ph.D.学生65人/教員100人ほどが所属しています。学部を代表する教員として、経営学分野ではHenry Mintzberg、経営情報学分野ではAIS Fellowにも選ばれたAlain Pinsonneaultをはじめとした教員陣が在籍しています。

2. マギル大学での研究生活

私の所属する経営学部の博士課程は典型的な北米型プログラムで、前半2年間は理論・研究方法に関する授業履修(コースワーク)、その後Research Paperの提出とComprehensive Examと呼ばれる一週間の論述試験+口頭試問を経て博士候補生となり、その後3~4年ほどをかけて博士論文を完成させます。私は現在博士課程4年目が終わりに近づき、博士論文執筆に集中する段階となっています。私の研究は、技術と組織の関係性を大きなテーマとしています。博士論文ではカナダ放射線技師協会と共同研究を実施し、同協会が設立したオンライン・コミュニティにおける知識コラボレーションについて研究を行っています。マギル大学の特徴である定

性・定量両研究法のバランスの取れた研究環境およびコースワークでのトレーニングを活かし、質的フィールド調査と量的デジタル・アーカイブ調査を組み合わせ、コミュニティの進化プロセスやメンバー間の暗黙知共有メカニズムを分析しています。途中段階の研究成果は2017年のAcademy of Management (AOM)にて発表し、そこで得たフィードバックや学内での教員・学生達との議論を元に、現在研究をブラッシュアップしています。博士学生も皆AOM, ICIS, AMCISなどで積極的に発表しており、良いピアプレッシャーの中で切磋琢磨する環境が築けています。

3. モントリオール圏の研究交流

マギル大学で得られた研究・教育環境は非常に素晴らしく、私にとって研究力を飛躍的に高める契機となったのですが、それと同じくらいモントリオールという地の利点も感じています。モントリオールにはマギル大学の他に、Université de Montréal, HEC Montreal, Concordia University, Université du Québec à Montréalなどの大学が近接しており、その集積の恩恵を様々に受けることができている。博士学生としては、4大学の経営学部の授業が単位互換され自由に履修できること、また博士論文コミッティーに他大学所属の教員を含めることが推



指導教員と博士学生達 (著者は右端)

奨られていること（私も HEC Montreal の教員に加わっていただいています）などが挙げられます。

また、これらの大学では研究セミナー（モントリオール外の大学から著名な研究者を招待して行われる研究発表セミナー）が充実しており、各大学の研究セミナーに自由に参加することができます。最近に限ってもマギル大学では MIT, Northwestern University, University of Cambridge, University of Minnesota 等からのゲスト、HEC Montreal では Boston College, University of Michigan からのゲストが訪れ、私もそれらのセミナーに参加しました。時にはそれらのゲストによるワークショップ（例：各種研究手法の紹介、エディターによるトップ誌への投稿の秘訣など）も開催され、研究の最前線に触れる機会が多く転がっています。加えてモントリオールは近年、モントリオール大学とマギル大学（+ Google や Facebook などが大学と共同で設置するラボ）を中心に世界的な AI 研究のハブとしての役割を担いつつあり、関連するカンファレンスなども頻繁に開催され始めています。このような集積効果は、個々の大学の研究環境を大幅に向上させる働きがあると感じています。大学集積というと真っ先にボストンが思い浮かぶかと思いますが、モントリオールも同様に大学研究者にとって非常に恵まれた環境であると感じています。皆様が在外研究先を選ばれる際にも、個々の大学に加えて、周辺の大学・研究所の集積度合いも加味してご検討いただくと、充実した研究環境実現の助けになるかもしれません。

そしてモントリオールのもう一つの特徴は、北米にありながらフランス語圏であるということです。

（モントリオール中心部では英語のみで問題なく生活が可能です）。この影響は当然街並みや食事、多様なバックグラウンドを持つ人々といった生活面一般でも大きいのですが、それと同じく研究環境にも強く影響を及ぼしています。現在の経営学分野では、特に A ジャーナルのパブリケーションを中心として定量的な実証研究（特にアメリカ上位大学では経済学ディシプリンおよび計量経済学／因果推論を用いた研究）が圧倒的多数を占めています。一方マギルをはじめとしたモントリオールの大学群は、ヨーロッパ出身の研究者も多くディシプリンや手法も多様で、一つのアプローチが支配的地位を築くような環境とはなっていません。定性研究も非常に盛んに行われており、定性手法を用いつつ A ジャーナルへ多数パブリケーションする研究者も複数在籍しています。ヨーロッパ・アジアを含め、確実に国際標準化が進む経営学・経営情報学ではあるものの、その中でもアプローチの濃淡は確実に存在するのだとこちらで強く感じました。在外研究環境を選ぶ上では、そのような研究へのアプローチも一つ大きなクライテリアとなるのではと思っています。

略歴

清水たくみ（しみず たくみ）

マギル大学博士候補生兼非常勤講師。技術と組織の関係性にフォーカスし、オンライン・コミュニティ上の知識コラボレーションや、組織横断的な技術標準形成プロセスを研究。外資系戦略コンサルティング会社、文教大学非常勤講師、慶應義塾大学特任助教等を経て現職。慶應義塾大学大学院修士課程修了。